

忘れること勿れと鐘を撞き 同朋に聞く

徳とく泉く寺ほ報う

No. 6 5

発行

令和5年3月

発行元 徳 泉 寺

仙台市宮城野区

榴岡 3-10-3

(022)297-4248

[tokusenji.send](mailto:tokusenji.sendai@gmail.com)

ai@gmail.com



ホームページ

tokusenji-

sendai.com



Instagram

tokusenji.sendai



TOKUSENJI.SENDAI

三月同朋会 東日本大震災追悼法要 勤修

東日本大震災から九十二年。三月十一日には十三回忌を迎えました。真宗大谷派有志寺院では毎年この日に「勿忘（わすれな）の鐘」と名付けた追悼法要を行います。今年はちょうど第二土曜日に当たり徳泉寺同朋会の開催日でした。そこで、同朋会のみなさんと一緒に「勿忘の鐘」を勤修致しました。

震災以降、沿岸部の被災地に支援に行く度、多くの方が苦しい胸の内を語ってくださいました。震災記録集の聞き取りでは、あるお寺の坊主さんが「私にはわからないことがある。」とおっしゃいました。私にはあなたの気持ちが見えないという心づもりがないと相手をかえって傷つけてしまう。だから聞かせてもらおう、ということなのだと思います。それ以降「聞く」ということの難しさと大切さをこの日が来ると再確認させてもらっています。

今回の法要では同朋会でも実に三年ぶりの座談をしました。周りの方と小グループを作って、「あの時どうであったか」「どう感じているか」を思い思いに語り合い、耳を傾け合いました。皆さんの体験を聞いているとあの時の情景がまざまざとよみがえり、経験の深さは時間の流れを越えるのだという気がしました。さすれば、深い傷を負った方にはまだまだ痛みが伴っているのだろうと推察できます。話すこと聞くことで互いをいたわり合う、コロナ禍でなかなかできなかったこのことの大切さをかみしめた法要となりました。

前住職法話 「聞法（モンポウ）ということ」

市民講座「親鸞に聞く」の講師を務めた時のこと。私自身の経験を交えながら法話をしたところ、感想文の中で「講師の体験談を聞きに来たのではない。親鸞聖人のことを聞きたいのだ」と書いた方がおられました。親鸞聖人についてもっとも知りたいと。しかし聞法というのは「わたくし」を横においてするものではありません。「わたし」を常に問いながら親鸞聖人の説かれた阿弥陀の本願とはどういうことであるのか、私に阿弥陀はどのような願いを掛けくださっているのかを「親鸞聖人の教えに聞いていく」のが聞法です。そのことなしにしていくら法話を聞いてもそれは知識にしかありません。普段、自我にまみれて命いっぱい生ききたいというわたしの命の本当の願いに耳を傾けられないわたしが、聞法を通して命の願いを聞いていくのです。

勤行（同朋奉讃式）



座談



撞鐘・黙祷

